



1. 3年間の思いを胸に、卒業証書を受け取る代表生徒 / 2. 晴空のよき日、最後の登校 / 3. 最後の学級活動を終え、思いが込み上げる / 4. 保護者に迎えられる、晴れやかな表情を見せる卒業生

「当たり前」のありがたさを胸に

3月11日(金)、市内各中学校で卒業式が行われ、517人の生徒が学び舎を巣立ちました。このうち桃陵中学校では規模を縮小して式が行われました。中学1年の終わりに臨時休校してから、修学旅行の中止や中体連の無観客開催など、あらゆる行事の変更を余儀なくされた卒業生たち。答辞を読んだ堀内夢さん(ほりうち ゆめ)は、「コロナ禍で当たり前の日々のかげがえのなさに気づかされました。この3年間は人とのつながりを実感し、深める大切な日々でした。」と述べ、友達と笑い合った日々や支えてくれた人々への感謝の気持ちを胸に、前に進んでいくことを誓いました。



市長コラム 第40回

ジェンダー平等をみんなで考えよう！

堀内 博行

ジェンダー平等とは、ひとりひとりの人間が、性別にかかわらず平等に責任や権利、機会を分かちあい、あらゆる物事を一緒に決めることができることを言います。また、SDGs(持続可能な開発目標)の中でも、ジェンダー平等は大変重要なテーマとして捉えています。

男性と女性は、身体のつくりは違いますが、平等です。しかし、今の社会では、個人の希望や能力ではなく、「性別」によって生き方や働き方の選択肢や機会が決められてしまうことがあります。特に「男性は仕事、女性は家庭」などの固定観念に基づく役割分担意識は、少なくなつたとはいえ、いまだ根深く残っています。2021世界経済フォーラムにおけるジェンダー・ギャップ指数で、日本は156か国中120位と国際社会においても大きく遅れをとっている状況です。また、今年度、市が実施した市民アンケートによると、男女が平等になっていると感じ

る人が増加はしているものの、男性が優遇されていると回答した人の割合は、家庭の中で42%、職場の中で46%、地域社会で56%、政治の場で72%、社会通念・しきたり上で73%と、依然として高くなっています。人口は半分は女性ですが、実際には職場や家庭などさまざまな場面で男性の方が優遇されていると感じることが多いのが現状です。

ジェンダー平等の実現は伊達市においても大変重要な課題です。市では、男性、女性にかかわらず、安心して子育てし、働くことができるよう、認定こども園の増築により子育て環境の充実を図っています。さらには、現在造成中の新工業団地や誘致が決定した大型商業施設など、働く場の充実を図っています。「男らしく、女らしく」ではなく「自分らしく」生きることが大切です。みんなが個性や能力を活かして活躍できる伊達市をつくっていきましょう！